

「国境」からみた中国内モンゴル自治区エゼネ旗の60年

児玉香菜子

千葉大学文学部

はじめに

モンゴル族は、モンゴル国、中国、ロシア連邦と広く分布する。なかでも最も多い人口を有するのは中国である。中国のなかでも最も多くの人口をもつのが内蒙古自治区（以下、内モンゴル）で、その人口は429万人（2005年現在）である。しかし、内モンゴル総人口は2386万人で、モンゴル族が占める割合はわずか18%にすぎない。圧倒的多数を占めるのが漢族で、8割以上を占める。次いで、モンゴル族の人口が多いのがモンゴル国で、250万人（2007年現在）である。

このように、モンゴル族は大きく中国とモンゴル国という異なる国家に属する。同じ民族でありながら、異なる国に分断されたモンゴル族にとって、国境はビジュアルには見えないものでありながら¹⁾、国境がもつ意味は時代とともにめまぐるしく変化し、人びとの暮らしを大きく翻弄してきた。

中国において、モンゴル国と最も長く国境をもつのが内モンゴルの最西端に位置するエゼネ（額濟納、中国語読みではエチナ）旗である（図1）。本稿の目的はモンゴル国と国境を接するエゼネ旗の過去60年を「国境」という視点から再考することである。

エゼネ旗の概要

エゼネ旗の年平均降水量はわずか39mmで、中国で最も乾燥した地域に属する。しかしながら、エゼネ旗の標高が相対的に低いために、祁連山脈に降りそそいだ降雪雨が河川となって流れ込んでいる。この河川は黒河とよばれる。黒河は中国第2の内陸河川である。そのため、黒河下流域に位置するエゼネ旗の土地景観は広大なモンゴル語で「ゴビ」とよばれる礫砂漠と、その中に流れ込むモンゴル語で「ゴル」とよばれる河川および河川沿いに形成された川辺林である。この川辺林の主な植生はポプラ（ヤナギ科、中国語で胡楊、モンゴル語でトーライ、学名は *Populus euphratica*）、

タマリスク（ギョリュウ科、中国語で紅柳、モンゴル語でソハイ、学名は *Tamrix ramosissima*）、葦類（イネ科、中国語で芦葦、モンゴル語でホルス、学名は *Phragmites australis*）である²⁾。

エゼネ旗に暮らすモンゴル族は牧畜を生業とし、「オアシス遊牧」³⁾をおこなっていた。「オアシス遊牧」とは川辺林の豊富な植生を利用して川辺林内で季節ごとに移動をおこなう放牧である。農業をまったくおこなってこなかった。というのも、およそ200年、農業が禁止されていたからである⁴⁾。

2004年現在、エゼネ旗の人口は1万7千人で、そのうちモンゴル族は約5000人である。

身の安全を保障してくれた「国境」

中華人民共和国が成立する1949年、エゼネ旗の人口はわずか2300人足らずであった。エゼネ旗のモンゴル族にはエゼネ＝トルゴード（額濟納土爾扈特）と呼ばれる人びとをはじめ、さまざまな出自をもつ人びとが住んでいた。エゼネ＝トルゴードとはこの川辺林に暮らすモンゴル族をいう。トルゴードはオイラート・モンゴル系の一部族で、戦乱を避けて現在の中国新疆ウイグル自治区イリ地方からヴォルガ河畔へ移動していった人びとである。その後、強まるロシアの圧迫から逃れて、1771年にイリ地方に帰還している。この移住は、ロシア軍の追撃によって10万人もの犠牲者をだした逃避行だったという。そのおよそ70年前、1698年にヴォルガ河畔からチベットのグライラマ訪問のために派遣されたトルゴード部の大使節団はいち早く清朝皇帝に帰属した。トルゴード部は嘉峪関に牧地を与えられた後、1731年に牧地をエゼネ河畔に移されている。この使節団の子孫が、エゼネ＝トルゴードと呼ばれる人びとである⁵⁾。

次いで、多かったのがモンゴル人民共和国（現モンゴル国）に出自を持つ人びとである。のちに

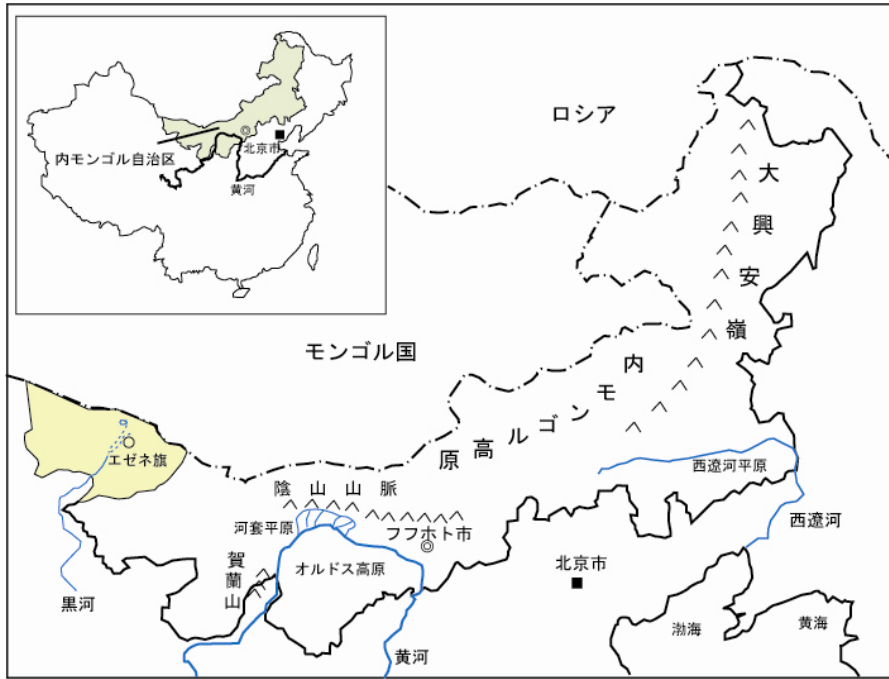


図1 エゼネ旗位置図



写真1 ポプラの中に暮らす牧畜民の住居（2003年8月撮影）

みる 1936年から37年にエゼネ旗に滞在した日本人の満洲航空社員の資料によると、当時の総人口1040人のうち、約4割に相当する380人が外モンゴル（＝モンゴル人民共和国、現モンゴル国）出身であった⁶⁾。というのは、1930年代、多くの人が革命後の宗教弾圧を逃れて中国へ亡命し

てきたからである。外モンゴル出身者は国境警備隊の目を逃れるようにして、エゼネ旗にやってきたという。彼らにとって、国境は命を保障する「境」であった。

軍事シンボルとしての「国境」

エゼネ旗は20世紀前半に世界的に注目を浴びる。それは、ロシア人探検家コズロフが1907年にカラホト（黒城）を発見したからである⁷⁾。その後、スウェーデンの探検家ヘディンなど著名な探検家がエゼネ旗を訪れている⁸⁾。日本とのかかわりも皆無だったわけではない。

関東軍は1936年、エゼネ旗に特務を派遣し、飛行場を建設した。その目的は、ドイツと日本をむすぶ航空路の確保とソ連と外モンゴルからの防共回廊の建設にあったとされている⁹⁾。

筆者が2003年、80歳代になるモンゴル族のおじいさんにオーラルヒストリーを聞き取りしているときだった。「『リーベン』というのは、日本のことかい？」と聞かれたのである。「リーベン」とは中国語で日本を意味する。「そうだ」と答え

ると、ここエゼネ旗にかつて自分が幼かった頃、日本軍がいたことを語ってくれた。その語りから日本軍の様子と人びとの反応をうかがうことができる^{注1)}。

寺院に日本軍がいました。日本軍たちはワーヨー（レンガを作るかまど）の胡楊に一年あまりいたのちに、寺院に移ってきたそうです。かれらは車と飛行機でやってきました。エゼネ旗では車というものをみたことがありませんでした。車と飛行機を見たら、こわがり、かつ驚いていました。人を捕まえるかなと珍しく思って、手を振っていました。現在は、車は珍しいものではありません。日本軍はおそらく40人くらいいたでしょう。学校の先生はわたしたちが日本軍を見に行くことを禁止しました。ときどき、車と飛行機を見せようと先生に連れられて行ったことがあります。

初めて飛行機と車をみた当時の人びとの驚きが伝わってくる。

日本軍の武器が火事に見舞われたことがあります。わたしは学校にいました。寺院にラブロンという一つの本堂がありました。そこに、ロブザン・ゲゲーンという活仏がいました。その活仏がグンブ（タール寺）に行っている間、ロドイというチベット人がそのラブロンを管理していました。火事が起きた晩、ロドイが当直していました。火事で本堂が燃えて、全部燃えてしまったと言われています。火事で日本軍の武器も燃やされました。ロドイというチベット人の管理人は火のなかに入って、地面に横たわって死のうとしたそうです。人びとが彼を引っ張りだしたと言われています。その晩、ロドイというチベットの管理人はそこにいませんでした。それで、ラブロンが燃えてしまったので、死のうと火のなかに入って地面に横たわって、ラマたちが助け出しました。彼がなぜ火のなか飛びこんで死のうと地面に横たわったのかというと、全部燃えてしまった、活仏が戻ってきたとき、なんていおうか、わたしは死にますと火のなか飛び込んだそうです。

この火事によって、関東軍は小銃、弾薬にくわえ、貯蔵していた生活必需品である糧食の一切を焼失したため、厳しい状況に追い込まれている⁶⁾。この火事は失火ではなく、故意の放火であったともいわれている¹⁰⁾。

また、日本軍が通訳として連れてきたであろうモンゴル人にまつわるエピソードもある。

日本人は40人余りいました。なかに、イシニマという一人のモンゴル人がおり、彼は真っ黒な飛行機でやってきて、ここの1人の女性を連れて行きました。女性の名前はドルマドルジと言いました。ドルマドルジはエゼネの人ではなく、よその出身でした。アルバイ・ヘル旗というのはどこにあるでしょうか。アルバイ・ヘル旗の人と言われています。太った色白の女性でした。イシニマはえらい人なので、いっぺんに飛行機で連れて行ってしまいました。イシニマがどこの出身かという、スニト旗の人と言われています。彼は日本語を分かるはずでしょう。なぜなら、日本人と一緒にいたんですから。彼はドルマドルジという娘を好きになって、連れて行ったのです。突然連れて行ったのではなく、前々から付き合っていたと言われています。イシニマという人は大きなぞで口をもつモンゴル服を着て、つま先のががったブーツを履いたハンサムな若者で、家々を訪問していました。彼女とどうやって知り合いになったんでしょうね。

次はこの関東軍の末路についてである。

日本人が何年いたのかよく分かりません。あまり長く滞在しなかったでしょう。ガーマン（「国民党」の意）というのがやってきて、日本人を西の方に連れていきました。たくさん軍隊が来ました。みな黒い馬に乗ってきました。日本人をみなラクダに乗せて、連れて行きました。そのラクダがどこから来たのか分かりません。西の酒泉^{注2)}の方へ連れて行きましたが、その後どうなったのか分かりません。

日本人には悲しい結末がおとずれている。1937年に関東軍エゼネ特務機関のメンバーおよび満洲

航空の社員の計10名と「売国奴」5人が国民政府によって逮捕され、蘭州に護送され、処刑されたのである^{9,11)}。これは日本海軍航空隊による西安・洛陽・蘭州等の飛行場爆撃の報復として処刑されたものである⁹⁾。この結果として、エゼネ旗への国民党政府の関与が強まったことは否めない。特務機関がもたらした歴史的な意味について、改めて検討されるべきであろう。

このようにエゼネ旗は軍事的に、非常に重要な位置を占めていたといえる。

「国境」防衛の拠点

エゼネ旗の軍事的な重要性は1949年の中華人民共和国成立以後もかわらない。黒河はエゼネ旗に入ると、現在「十号」と呼ばれる国防科研基地で二つに分流する。エゼネ旗で「号」の付く地名は軍事用地を意味する。この国防科研基地は、1958年に人民解放軍がこの分流地点に暮らしていた197戸の牧畜民と1つのチベット仏教寺院を移住させて駐屯し建築した軍事基地である⁴⁾。

絶えることなく河川水が流れ込む分岐点はエゼネ旗の中でもとりわけ豊かなところであったという。この豊かな河川の分岐点に暮らしていた人びとは突然やってきた軍隊に移住させられる。当時わずか2歳だった牧畜民の女性は祖母が移住の際に涙を流しながらバインボクトに向かってチベット式の五体投地をしていたのを今でも覚えているという。のちに、祖母になぜあの時泣いていたのか尋ねると、こんなよい牧地を去らなければならないことを思って泣いていたと語ってくれたそうである。まさしく強制移住であった。その後、多くの家畜が移住先の新しい牧地に慣れず死んだという。

エゼネ旗が軍事拠点として選ばれた理由はエゼネ旗の地理的重要性である。広大なゴビ砂漠の中に形成されたオアシス、エゼネ旗は東西を結ぶシルクロードとモンゴル高原と河西回廊を結ぶ南北交通の要衝であった。同時に、対遊牧民の前線基地としても屯田兵の食糧基地としても重要な役割を担ってきた¹²⁾。近現代でもその重要性はかわっていない。

60年代から本格化する中ソ対立の先鋭化はモンゴル人民共和国と長い国境線を持つエゼネ旗に、前線基地としての性格を与えた。なぜなら、

当時モンゴル人民共和国はソ連の強い影響下にあったからである。中国は、ソ連との軍事的な緊張が高まるにつれて、モンゴル人民共和国との国境を遮断し、エゼネ旗に多くの軍人が駐在するようになる。エゼネ旗の行政区分が1969年から1979年まで内モンゴル自治区から甘粛省に変更された。その理由は、ソ連とモンゴル人民共和国に対する防衛のため、各軍区に所属させる必要があったためである¹³⁾。その間、1964年ロプノールで実施された核実験と連動する形で、エゼネ旗で弾道ミサイルの実験が実施されていたという⁴⁾。まさに国境は軍事的なシンボルであった。現在でも、当時の塹壕を国境近くで散見できる。

この軍事基地の利用は弾道ミサイルの実験地をへて、1970年には衛星ロケット発射台、2003年に成功した有人ロケット発射台へと拡大している。

政治的迫害を意味する「国境」

1966年からはじまり10年間にわたって政治的混乱、文化大革命の嵐がエゼネ旗で吹き荒れた。その激しさは地理的、軍事的な重要性と大きく関係していたであろう¹⁴⁾。この迫害の理由の一つとされたのが、モンゴル人民共和国から亡命してきた人びとによるスパイ行為である。

1961年に夫と知り合って、結婚しました。「ハルハのスパイ」「内人党（内蒙古人民革命党員）」「実権派の富牧」「牧主」といった多くのレッテルを貼られて、わたしは1966年9月から殴られはじめました（ツェレンナドメド）²⁰⁾。

—文化大革命のとき、信仰心をもって仏様を拝むことはできたでしょうか？

いいえ。そんなことができるはずありません。1966年に「六類分子」と言うレッテルを貼られて殴られはじめました。「反革命者」「ハルハのスパイ」「牧主・富牧」「トルゴード党員」「内人党員（内蒙古人民革命党党員）」などと言う6つのレッテルを貼られて、「六類分子」になったわけです（ドルマンツォー）²⁰⁾。

わたしの父母はハルハから来た人たちだったそうです。バヤンホンゴル・アイマグのジョノン

ワン旗の人だったそうですよ。ハルハの革命から逃げて来た人びとでした。何の意味があったでしょうねえ、ここへ来てはまた「文化大革命」に見舞われて、ひどい目にあったのですから。わたしの父は「モンゴル国に寝返ろうとしている」だの、「黒幫と関係がある」だのと、いろいろな罪名を与えられ、捕まえられて連れて行かれました。そして父は亡くなりました。わたしはおよそ10歳だったでしょう、父が捕らえられたときは、父の名前はゴチョイスレンで、母の名前はホムボンです。わたしたちは4人きょうだいです。2人の娘が亡くなり、今はわたしがいます。弟のナムジルも健在です。(マリヤ)²⁰⁾

また、モンゴル国に親戚がある人、訪問したことがある人も迫害の対象となった。

一文化大革命の渦中では主にどういう理由で批判されたのですか？ 罪名はなんでしたか？ 主に「ハルハのスパイ」として殴られました。わたしは（ハルハから一筆者注）帰国後、キリル文字ができるので多くの人たちにキリル文字で手紙を書いてあげました。ハルハに親戚や友人をもつお年寄りたちがわたしに頼んで手紙を書かせていました。それに、先方から届いたキリル文字の手紙をわたしに読ませていました。そして、その返事を書かせていました。そんなことをしていたので、文化大革命がはじまるとそうした親切がぜんぶ禍となって、「ハルハのスパイ」をしていたと言うことになり、無実の罪を着せられました。ハルハへ手紙を書かせていた人たちも批判されてひどく問い詰められていたようです。それで誰かがわたしのことを「ハルハのスパイだ」と言ったようです（ツェレンナドメド）²⁰⁾。

日本の特務機関が設置されたこともその激しさの理由として無縁ではないであろう。皮肉にも、命を保障した国境が迫害の原因となり、政治的な象徴となったのである。

経済交流の幕開け—「国境」貿易

1960年からおよそ30年間モンゴル人民共和国

との国境は閉ざされ、行き来はなくなるものの、モンゴル人民共和国との国境はエゼネ旗の人びとにとっては「軍事的」にも「政治的」にもおおきな存在であった。しかし、それはソ連解体の3年前、中ソ和解が実現した1989年を境に大きく変化しはじめる。1992年のモンゴル人民共和国の民主化を受け、1993年モンゴル国とエゼネ旗の国境が地元の人びとに再び開かれたのである⁴⁾。これは、分断された家族の交流の窓口を開いたことを意味した。下記はモンゴル国に母と兄弟を持つモンゴル牧畜民の語りである。ナランさんは1930年代ハルハから内モンゴルに移住してきた家族が1949年ハルハに再び戻る際に、エゼネ旗に暮らす祖母の下に1人残された。

—ハルハにいらっしゃる親戚たちとお付き合いはありますか？

あれは何年のことだったかなあ。きょうだいたちがわたしを探しはじめました。すぐに返事をして連絡を取りました。そして1990年か1991年にわたしたちは母を訪問することができました。フフホトへ出て、そこからウランバートルに飛び、そしてウムヌゴビへ向かいました。別れて41年後にふたたび母に会い、弟たちと知り合いになりました。以後、彼らもまたこちらへ来て、もう幾度も往来しあっています。現在は、ツェへの国境で往来できるので、とても近くなり、また安上がりになりました。以前は、とても費用がかさみました。二連浩特の国境で20日間待たされたこともありました。今日では、ますます簡単になっています。国境貿易が許可されているときに^{注3)}、そのまま北上すればいいのですから。母が生きているあいだは、毎年会いに行こうと思っています。いま、母は88歳です。1916年生まれですから（ナラン）²⁰⁾。

しかし、モンゴル国とエゼネ旗のモンゴル族にとって最も重要な交流となったのは、経済的交流であった。モンゴル国から畜産品を持った多くの人エゼネ旗にやってきてそれを売却し、その現金でさまざまな日用雑貨品を大量に買い込むようになったのである。モンゴル国との国境に隣接して形成されている市場には、モンゴル国の公用文字であるキリル文字の看板がかかげられた商店が



写真2 エゼネ旗の国境沿いの街。さまざまな日用品が並べられている。(2003年9月撮影)



写真3 モンゴル国から運び込まれて山積みになった石炭（右奥）。石炭を積載したトラックが連なる。(2006年9月撮影)



写真4 移民村（2003年9月撮影）



写真5 国境の新しい窓口（2009年3月撮影）

つらなる（写真2）。店の軒先には、小麦粉、ビール、アルコール類から、太陽発電機、風力発電機、テレビなどの電化製品が並べられている。

資源輸入の窓口―「国境」

現在、中国政府は海外から積極的に石炭を輸入している。その輸入先の1つがモンゴル国である。エゼネ旗の北に良質の石炭を産出する鉱山があるため、エゼネ旗が輸入の窓口となって大量の石炭がエゼネ旗に運び込まれている。その石炭を中国各地に運搬する大型トラックがエゼネ旗に押し寄せている（写真3）。この石炭の輸入を一手に引き受けていたのが慶華公司である。さらに、石炭を運搬するための鉄路も建設され、建設作業のための労働者、宿泊施設、食堂など、街が急速に拡大している。

モンゴル国からの石炭の輸入はさらに大規模となり、2008年より新たに3つの会社が加わり、大規模に輸入をおこなっている（エゼネ旗HP：http://www.ejnq.gov.cn/Category_158/Index.aspx）。他方で、モンゴル国では、原料および国産品の保護のために、畜産品の輸出を禁止したという。

国境は、地域、そして地元の人びとの生活から離れ、グローバル化の象徴となっている。

「国境」を超えた地球環境問題

中国では、「砂漠化」を理由に、従来牧畜によって暮らしてきた人びとは故郷を去ることを強いられている。それは生態移民と呼ばれる政策のためである。

エゼネ旗では過去60年の間に著しい自然環境の悪化を経験した¹⁵⁾。その理由はエゼネ旗に流れ込む河川流量の減少である。それによって引き起こされた地下水位の低下、オアシスの荒廃である。その結果がオリンピック開催地を勝ち取った北京を襲った砂嵐であった¹⁶⁾。しかし、その原因は、エゼネ旗にあるのではなく、黒河中流域の河川水を利用した灌漑による農地開発にある¹⁵⁾。

しかしながら、中国政府は河川の護岸工事、農業の節水を進めるとともに、オアシス内の放牧を禁止する政策、「生態移民」をはじめ¹⁷⁾。それは、オアシスやゴビの植生を守るために、そこに暮らす人びとと家畜を外に移住させるというものであった。牧地はフェンスで囲まれ、放牧が禁止さ

れた。かれらには集中居住地に住居が与えられた（写真4）。

国境は、いつでも国の政治経済的な状況を反映する鏡であった。今は、環境問題という国境をこえたグローバルな地球環境問題のなかで、人びとは移住を強いられ、大きな社会的文化的変容を経験している¹⁸⁾。

おわりに

エゼネ旗の国境がもつ意味は、命を保証するものから、軍事的拠点、政治的迫害のシンボルとかわり、エゼネに暮らす人びとの暮らしを大きく翻弄してきた。1990年代以降は、市場経済化を進めるモンゴル国と中国をつなぐ国境貿易としてモンゴル族の交流の場となった。21世紀になると、モンゴル国からの石炭輸入の窓口として、急激な開発が進んでいる。2011年にはエゼネ旗の国境は24時間体制の国際交易窓口になるという（写真5）。それによってこれまでモンゴル国出身者とエゼネ旗出身者に限られていた出入国が、外国人にも開かれることになる。エゼネ旗は、再び、国際的な窓口になりつつある。他方で、エゼネ旗は「境」をこえて飛んでいく黄砂の発生源の一つとされ、地元住民と牧畜民を川辺林から移住させる環境政策が実施された。強制移住ともいえるこの環境政策は、地域社会に大きな変容を引き起こしている。

国境は、いつでも国の政治経済的な状況を反映する鏡であった。今や、エゼネ旗の国境は激動する中国の象徴となりつつある。

附記

本稿は、児玉^{2,19)}、2009年7月にモンゴル国ウランバートルで開催された国際学術シンポジウム「世界史のなかのノモンハン事件（ハルハ河会戦）―過去を知り、未来を語る―」での報告「Boundary, international relationships and local people -A case study of Ejine banner, Inner Mongolia, China」および第14回雲南懇話会（2010年4月開催）の報告に基づくものである。

謝辞

本研究は、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「水資源変動負荷に対するオアシス地域

の適応力評価とその歴史の変遷（略称オアシスプロジェクト）」および科研（20820066, 21221011）の助成をうけたものである。

注

- 1) デリググンジ。モンゴル族。1924年生まれ。聞き取りは2003年8月に児玉、2005年5月にサラングレル、児玉、アルタンチェェグによっておこなわれた。翻訳はサラングレルと児玉による。
- 2) エゼネからみると酒泉は南に位置している。それが西と表現されているのは、エゼネ＝トルゴードの伝統的な方角認識では、南は西と表現されるためである。
- 3) 1年に4回国境貿易が開かれていた。現在は通年である。

参考文献

- 1) 平野健一郎（2009）「禍福おりなす大地」『天地人』5：2-3
- 2) 児玉香菜子（2007）「エゼネの五〇年」中尾正義・フフバートル・小長谷有紀編『中国辺境地域の50年－黒河流域の人びとから見た現代』東方書店, 159-182
- 3) 小長谷有紀（2004）「中国内蒙古自治区アラシャン盟エチナ旗における自然資源の利用」『オアシス地域研究会報』4-1:1-6
- 4) 額濟納旗誌編纂委員会（1998）『額濟納旗誌』方志出版社
- 5) 宮脇淳子（1995）『最後の遊牧帝国』講談社
- 6) 萩原正三（1976）『関東軍特務機関シルクロードに消ゆ』ビブリア
- 7) コズロフ 西義之訳（2004）（1967）『蒙古と青海』白水社
- 8) ヘディン、スウェン（1978）（1966）「ゴビ砂漠探検記」『ゴビ砂漠探検記 世界の屋根を越えて ベドウィンの道』梅棹忠夫訳、筑摩書房, 5-205
- 9) 森久男（2009）『日本陸軍と内蒙工作』講談社
- 10) 蔵登米徳格・高通（2007）「日本特務在額濟納旗の間諜活動及被圍捕経過」『阿拉善往事 上』寧夏人民出版社, 196-199（1985『額濟納旗文史資料』第一編, 133-140）

- 11) 李翰園（2007）「破獲額濟納旗日本特務機關的経過」『阿拉善往事 上』寧夏人民出版社, 190-195
- 12) 初山明（1999）『漢帝国と辺境社会』中公新書
- 13) 宮脇淳子（2002）『モンゴルの歴史』刀水書房
- 14) 小長谷有紀（2007）「まえがき」小長谷有紀・サラングレル・児玉香菜子編『オーラルヒストリー－エジネーに生きる母たちの生涯』（オアシス地域研究会報別冊）オアシスプロジェクト研究会（総合地球環境学研究所）, 1-2
- 15) 児玉香菜子（2004）「黒河下流域の調査報告－自然・社会環境変動下における現代牧畜民の適応戦略－」『オアシス地域研究会報』4-1:73-109
- 16) 杉本伸夫・清水厚・松井一郎・鶴野伊津志・荒生公雄・陳岩（2002）「連続運転偏向ライダーネットワークによる黄砂の動態把握」『地球環境』7-2:197-207
- 17) 児玉香菜子（2005）「生態移民」による地下水資源の危機」小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編『中国の環境政策「生態移民」』昭和堂, 56-76
- 18) 児玉香菜子（2007）「開発型環境政策と貧困の悪循環－環境影響の事前評価の構築に向けて－」沈衛榮・中尾正義・史金波主編『黒水城人文与環境研究』中国人民大学出版社, 274-296
- 19) 児玉香菜子（2008）「時代を映す鏡－中国とモンゴル国の国境の町から」『月刊みんぱく』32-2：5
- 20) 小長谷有紀・サラングレル・児玉香菜子編（2007）『オーラルヒストリー－エジネーに生きる母たちの生涯－』（オアシス地域研究会報別冊）オアシスプロジェクト研究会（総合地球環境学研究所）

Summary

The Past Sixty Years in the Ejene Banner of Inner Mongolia, China

Kanako Kodama

Chiba University

The purpose of this paper is to rethink the meanings of the boundary for local people who have been at the mercy of international relationships, using a case study of Ejina banner, Inner Mongolia, China. Ejene banner is located in the western-most area of Inner Mongolia, and it has the longest boundary with Mongolia. During the year water from snow and rain in the Qilian mountains flows into Ejene banner, forming an oasis in the vast gobi. Ejene oasis has been an important point for transportation and military purposes.

There are many Khalkh Mongols in Ejene because they fled from oppression in Mongolia during the 1930s, after revolution. The geographical boundary is meant to guarantee their existence. In 1936, the spy unit (tewu) of the Kwantung Army established an office in Ejene and constructed an airfield. However, in 1937 members of the spy unit were arrested and executed by the Chinese nationalist government. Consequently, it can be said that the influence of the Chinese nationalist government in Ejene banner grew stronger. After the founding of the People's Republic of China in 1949, Ejene remained very important for the military, and in 1958 the Chinese government established a military base in Ejene banner. For that purpose 197 families and one Tibetan Buddhism temple were forced to migrate from the hometown. In the 1960s, as a result of the Sino-Soviet dispute the boundary was completely blocked and many soldiers were stationed in Ejene banner. During the Cultural Revolution (1966-1976), many Mongolians who originated from Khalkh were persecuted on a charge of being Mongolian spies and so on. Ironically, the meaning of the boundary changed from securing their existence to the cause of resisting persecution, and it has become a political symbol. When the boundary started to open after the Sino-Soviet détente, it became the window to trade. A number of people came from Mongolia. They sold their livestock and livestock products, and bought various goods. Now, because there are mines, to the north of Ejene, in Mongolia, Ejene is the gateway for the import of mineral resources. The railroad is used for the transportation of coals from Ejene to the big cities. Coal mining has also brought many workers to Ejene. Ejene banner is developing remarkably. On the other hand, under environmental policy to prevent further desertification, Mongolian pastoralists are forced to migrate and change their community and own cultures.

This history and present situation show that local people who live near the boundary are always at the mercy of military, political, economic and international relationship realities.